

# 風の輪

## 学齡期の法外支援から成人施設へ

ワークセンター豊新施設長 加藤啓一郎  
(昭和55年〜平成4年  
淡路こども園に勤務)



幼児・学齡児合同びわ湖キャンブ

私が淡路こども園で働き始めたのは、淡路こども園が開設された翌年のこと。何年かして、初めての卒園生が小学校へ通うようになったが、本人の立場に立って、信頼関係を作っていかうとする淡路こども園の方針と、指導訓練中心の学校の方針との間にはかなりな隔たりがあった。学校へ見学に行くと、大声でしゃりつけるだけではなく、動き回るからという事で紐で縛られている子どももいた。今から考えると明らかに虐

待行為と言えるが、抗議しても、この子らにはこうするしかない、という無理な答えが返ってきた。間に入り困ったのはお母さん方で、学校の先生にわかってもらおうと、母親も子どもと一緒に小学校へ通って理解を求めた。淡路こども園では「母子登校」と言って、母親からその様子を定期的に聞きとっていたが、かなりな負担になっていたようで、母子ともに疲弊している様子がうかがわれた。

こういった状況にある親を応援するために、夏休み、丹波篠山の龍蔵寺にある信行道場を借りて親子で泊まる、淡路こども園を遊びの場として開放するなどしたが、疲労が軽減することはなかった。そんな時に親を気持ちのうえで助けたのは、以下の二つの事柄であったと思う。



地域の人も一緒に夜店まつり

一つは、風の子そだち園と  
もう一つは、不登校の子どもたちのために朝から学童部を開けるようにしたこと、その仕事を私が担当した。朝から学童部を始めたのが昭和61年4月のこと。不登校が続く子どもは車で迎えにいったり、話を聞いて「うちも通わせたい」という申し入れがあったり、年度が終わるころには、10人以上の不登校の子どもたちが学童部に所属するように

いう淡路こども園の方針を成人に引き継いで支援を行なっていく施設がオープンするということであり、義務教育の期間を何とか乗り越えられれば、再び、本人の立場に立った支援が受けられる、という希望ができたことである。

なった。  
その後の2年間で不登校の子どもは20人弱に増え、全体で30人近い障がい児学童が淡路こども園学童部に所属するようになった。学童部の朝からの開設は不登校の問題だけに留まらず、頼れる場所ができたことで、親の入院に伴い本人を宿泊で見守りたい、家に来て見てほしいという緊急援助の依頼が増え、3年間で5件、期間にして、延べ1年近くの緊急援助を引き受けることになった。